

博物館に入ったミグ21戦闘機 -- ラオスからみたドイモイ (コラム) (特集 ドイモイ30年 -- 模索するベトナム)

著者	瀬戸 裕之
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	257
ページ	24-25
発行年	2017-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00048533

博物館に入ったミグ21戦闘機

―ラオスからみたドイモイ―

瀬戸 裕之

ラオスは、二〇一五年一二月二日にラオス人民民主共和国の樹立四〇周年を迎え、国会議事堂前において華やかなパレードが行われた。その数カ月前に、隣接するラオス人民軍歴史博物館の中庭に、一機の戦闘機が搬入された。冷戦期を代表するジェット戦闘機ミグ21である。ラオスにとつて、ベトナムのドイモイから受けた最も大きな影響は、近隣諸国との緊張の緩和である。

ラオスとベトナムの間では、一九七五年以前のラオス内戦期から現在に至るまで、「特別な関係」と呼ばれる友好関係が維持されている。ベトナムの政権党であるベトナム共産党とラオスの政権党であるラオス人民革命党の起源は、一九三〇年二月に結党されたインドシナ共産党である。一九五一年の第二回党大会において国別に党

が設立されることが決定され、ラオスでは、一九五五年三月に、ラオス人民党（ラオス人民革命党の前身）が結党された。ラオス革命を指導したカイソーン・ポムヴィーンは、ベトナム人の父とラオス人の母を持ち、ハノイ大学で教育を受け、インドシナ共産党に入党した人物である。さらに、ベトナム戦争中に、ラオス国内にホーチミン・ルートが設けられ、北ベトナムが南ベトナムでの戦闘と解放を支援するための重要な輸送路となった。一方で、ベトナムは、

ラオス人共産主義者に対して、人材育成、武器の供給、ベトナム義勇軍の戦闘への参加など、全面的な支援を行った。

一九七五年にラオスの現体制が樹立され、両国の友好関係が国家間レベルへと格上げされたのが、一九七七年七月一八日に締結され

たラオス・ベトナム友好・協力条約である。全部で七カ条からなり、第一条において、ラオスとベトナムの間の「特別な関係」を拡大することが定められ、第二条において、独立、主権、領土を防衛する目的で相互に支援・協力することが定められた。一九七五年から一九八〇年代前半までの時期に、ラオスには、最大で五万人のベトナム義勇軍が駐屯していたとされるが、この条約によって、ベトナム軍のラオス駐留が正当化できることになった。

一九七五年に、ベトナムの支援により、ラオスで開始された事業がある。それが、シエンクアーン県の中心地ポーンサヴァンでの空港建設である。シエンクアーン県は、ラオス中部にあり、ポーンサヴァンは、ヴィエンチャンの北方約二四〇キロに位置している。空港は、現在も、シエンクアーンへの空からの玄関口となっているが、降り立った時に印象的なのは、滑走路の大きさである。全長が二四〇メートルあり、ラオスの小さな地方空港に慣れている者を驚かせる。当初は、ベトナムの援助によって開始されたが、一九七八年にソ連とラオスの間で軍事協力が

決定されると、ソ連が資金援助を行い、ベトナム人技術者が指導して建設が進められた。この事業の目的は、ミグ21の基地建設である。ラオス国内でミグ21が配備されたのは、ヴィエンチャンとシエンクアーンの二カ所のみである。はじめに配備されたのは、ヴィエンチャンのワットタイ空港（軍民兼用）であり、一九七八年に一〇機が導入された。その後、年に一〇機が追加されて、多い時には、ラオス全国で五〇機以上が配備されていたという。空港の建設とともに、ポンサーリー、サムヌーア、シエンクアーンなど、かつての革命根拠地から有望な青年を募集し、パイロットの養成が行われた。シエンクアーン空港は、一九七九年に完成し、ワットタイ空港から、ミグ21を持つ第七〇二航空大隊が移ってきた。開港式典には、一般市民も招待され、ベトナムのミグ21航空隊とラオスのミグ21航空隊による航空ショーが行われた。

山間部のシエンクアーンにミグ21の基地が建設された理由は、ワットタイ空港がタイとの国境に近く、戦争になれば、タイからの砲撃によって破壊される可能性があったためだ、という。当時の国際社会



ラオス人民軍歴史博物館に展示されているミグ21
(筆者撮影)

でのラオスの位置づけを窺わせるのが、一九七七年二月の第二期党中央執行委員会第四回総会での報告である。この中で、ラオスが「東南アジアにおける社会主義陣営の前線基地」であるという認識が示された。ラオスは、アメリカと同盟し、自由主義陣営に加わっているタイと、多くがメコン河を境にして一八三五キロにわたって国境を接している。一九七〇年代から一九八〇年代に、ラオスとタイの間では、しばしば国境紛争を経験し、さらに、タイから国境を越えて反政府勢力が侵入し、ラオス国内で破壊活動を行うこともあった。また、地理的にみると、シエンクアーンは、アメリカ軍基地があったタイ東北部とベトナムの首都ハ

ノイの中間点に位置している。ベトナム戦争中、ミグ21は、北爆のために飛来するアメリカ軍機に対する迎撃機として活躍した。シエンクアーンへのミグ21の配備は、ラオスが、社会主義陣営でのインドシナ防衛の枠組みに組み込まれたことを意味している。

しかし、ベトナムがドイモイを開始し、対外政策を変更すると、ラオスの国際社会での位置づけも大きく変化した。ドイモイと時を同じくして、ラオスでも、一九八六年の第四回党大会において改革路線（ネオオタン・ピアンペーンマイ）が採用され、経済メカニズムの改革と、中国・西側諸国との関係改善が進められるようになった。ベトナムが一九八五年八月にカンボジアに駐留する軍の撤退を表明すると、ラオスでも、一九八七年末から駐留していたベトナム義勇軍の帰国が始まり、一九八八年一月には、帰国が完了したと発表された。これと並行して、タイのチャートチャーイ首相は、「インドシナを戦場から市場へ」と転換することを提唱し、一九八九年には、カイソン首相がバンコクを公式訪問した。ラオスの各省に配置されていたベトナム人技

術者・顧問も徐々に帰国し、代わりに、国連機関、フランス、スウェーデン、日本などの西側諸国の援助が入ってくるようになった。一九九四年には、オーストラリアの援助により、ヴィエンチャン近郊のタードウーアとタイ側のノーンカイーを結ぶ友好橋が建設され、タイとの経済交流が大きく発展した。

ワットタイ空港に配備されていたミグ21は、一九九二年に、その大半がシエンクアーン空港に移された。西側諸国との交流が増加し、ワットタイ空港が、ラオスを訪問する西側諸国の外交官、援助関係者、ビジネスマン、観光客のための玄関口になったため、空港から軍事色を取り除いたと考えられる。ラオス空軍を支援していたロシア人顧問、ベトナム人顧問も帰国し、シエンクアーンの基地では、遅くとも一九九四年には、ラオス人整備士のみでミグ21が整備されていたという。

一九九五年七月にベトナムが東南アジア諸国連合（ASEAN）に加盟すると、それを追うように、一九九七年七月にラオスがASEANに加盟した。シエンクアーンの基地では、その後も、二〇〇〇

年までミグ21の整備が行われ、一〇機程度が稼働可能だったが、機体の耐用年数を超えてしまい、それ以上の修理が不可能だと判断されたため、空港に放置された。そして、ポーンサヴァンに新たな空港の建設準備が始まった二〇一五年になって、残っていたミグ21も撤去され、そのうち一機がヴィエンチャンの博物館に移された。

ラオスは、二〇一三年二月に世界貿易機関（WTO）に加盟し、二〇一六年には、二回目のASEAN議長国を務め、九月に主宰したASEAN首脳会議には、アメリカのオバマ大統領も出席した。ラオスとベトナムの間では、現在も「特別な関係」が維持され、政府高官の相互訪問、党幹部の政治教育、民間による投資など、幅広い交流が行われている。しかし、現在、ラオスを取り巻く国際環境において、ジェット戦闘機が必要となる国際紛争は、もはや存在しない。博物館のミグ21は、ドイモイ後におけるラオスの平和を象徴するものである。

（せと ひろゆき／新潟国際情報
大学国際学部准教授）